
テイルズオブジアビス 【ミュウの異世界冒険記】

にい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

【Nコード】

N3028Z

【作者名】

にい

【あらすじ】

エルドラントの最終決戦から幾分か時間が経過したある日。

ミュウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。

悲しみに耽るミュウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。

絶体絶命のピンチにミュウを救った光とは

そんな有りがち設定ではありますが、ミュウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していたものです。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているもので、加
筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話 いきなりピンチ!? VS 骨(前書き)

初めましての人は初めまして！

TOSからの人はこんにちは！

今回投稿させて頂くのは、今からするとちょっと古い(?) だけど名作中の名作、ジァビスの長編です。

歩いて喋るソーサリーリングことミュウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話 いきなりピンチ！？ VS 骨

よしっ！ お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

なんだとっ！ ブタザルのクセに生意気なっ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

俺、変わるよ……変わりたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなったご主人様。

よしっ、ミュウ！ 俺が合図をしたら火を吹くんだぞ！

一緒に戦った日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。

チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獣チーグル達が群れを成して暮らしている。

その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。

チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。

だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサリーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル

「あの子……森へ返ってきてからずっと元気ないわね」

「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」

仲間のチーグル達が元気のないその子を見て、同情の眼差しを向ける。

「ずっと慕っていた主人が死んじゃったんでしょ？ 今はそっとしてあげておいた方が」

茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクツと反応を示した。

そして彼 ミュウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。

「ご主人様は死んでないですよっ！ 必ず生きて返ってくるって約束……約束を……」

言葉を詰まらせたと思ったら、ミュウは突然大粒の涙を流した。

「（約束……したはずですよ……でも……どうして帰ってこないですの……？）」

ミュウには主人と慕う人間が居た。

主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。

オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということを卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。

オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。

その一途な思いがただけルークの救いになったことかミュウは知らないが、それだけルークのことが大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。

しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。

ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰ってくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。

それ以来、ルークの姿は見えていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去って行った。

仲間達が静止するように声を上げていた気もするが、感情的になったミュウの耳には届いていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミュウはただひたすらに走る。

仲間に涙を見られたくないわけではなかった。でもなぜかあの場には居られなかった。

ミュウはただ無心で走っていた　いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走っていた。

「はあ……はあ……ふう……」

住处とはかなり離れた場所でミュウは一息吐く。走っている内に涙は乾いていた。

しかし、渴いたのは涙だけではない。

「喉が渴いたですの」

小さな身体で三十分近くも走った為、ミュウの疲れはピークに達していた。

ミュウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅと水を飲み始めた。

「……ぷはあ……」

たくさんの水を身体に飲み入れたミュウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。

その時に思うことも、たった一人のご主人様のことだけ……

「（ご主人様……今、どこにいるのです？　会いたいですの……今すぐにでも）」

そんな切なる願いを込めるミュウ。

ぞっ……

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅっ！？ この重みのある足音、冷たいようでどこか暖かさを感じるオーラ……ま、まさかっ！？）」

ミュウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミュウは静かに振り返った。

そこに居たのは

「ご、ごごごご、ご主人様！ 帰って……帰ってきてくれたですの
~~~~~」

ミュウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「ご主人様、ミュウはこの日をずっと心待ちにしてたですよ、またお会いできてうれしいですよ、すりすりですよ。ああ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなくご主人さ」

ぎゅむっ！ びった~~~~んっ！

ミュウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミュウの

耳を引っつかみ、地面に思いつき叩き付けた。

「い、痛いのです。ご主人様何するです……あぁっ!？」

叩きつけられたことで少し平静を取り戻したミュウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……ご主人様ではないのですのっ!」

ミュウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミュウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持っていると勝手に勘違いしてしまったみたいである。

「お、お前は……たしか……死霊スケルトンですの!」

死霊スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやってたら自分のご主人と間違えられるのか、ミュウに問いたいくらいだ。

しかし、ミュウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅっ！　ここは逃げるですの〜！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミュウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言う判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵愾心を見せられたスケルトンもミュウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミュウは足の早さだけは自信があつた。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことはくらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まってきた。

どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅっ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるのです！？　あいつはアクゼリウス第14坑道にしか出没しないのではなかったのですの〜！？」

ちょっとしたプトリビアをぼやきながら必死に逃げるミュウ。

一見、余裕があるようにも見えるが、実際はかなり切羽詰っていた。

「（このままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……ここは覚悟を決めて、ミュウは戦うですの！）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミュウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふぁいあ〜っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放った。  
スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガうつ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかった。

ほとんどダメージを受けていない様子である。

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。  
ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

「や、やっぱりダメですの〜〜〜〜っ！ 勝てっこないですの〜〜〜〜っ！」

半べそを描きながら、走るミュウ。

逃げ切れない、戦えない、怖い、の三拍子が揃った今、ミュウは絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のミュウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジェイドさん、アニスさん、ナタリアさん！ 助けてですの……っ）」

ミュウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力さを

悔やみながら……

そして、ミュウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。

「（ご主人様……っ！ 助けて……ですのっ！）」

スケルトンはついに自分の間合いの中にミュウを捕えた。  
今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。

だがその時、ミュウの身体に異変が発せられていることに気付いた。

ミュウのお腹に眩い光が発せられていた。

いや、正確に言うと、ミュウのお腹に着けている装飾品が光りを放っている。

「（こ、これはどういうことですかっ!? ソーサリーリングが光っているのですの!）」

光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。

目を開けられないほどの光が辺りを包む。

その中心に居たミュウはどうすればいいのかわからずオロオロするばかりであった。

そして爆発的な光がソーサリーリングを中心に放たれた。

「みゅっ!? みゅみゅみゅ~~~~~っ!」

ミュウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

って行くように聞こえた。

そして、瞬時に光は収まった。

そこにはミュウの姿が完全に消え失せていた。

ちい、座標がずれたか……

声がする。どこからするのかは分からない。

まあいい、この世界に転送は完了した。

だけど、その声は異様な威圧感を放っている。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。

後は部下に回収を急がせるとするか……

それっきり声は聞こえなくなる。ほっと胸を撫で下ろし、安堵する。

そしてミュウの意識はゆっくりと回復していくのであった。

## 第1話 いきなりピンチ！？ VS 骨（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それにしても40000文字制限はすごい！

これなら思ったよりも早く完結できるかもです。

第2話は明日投稿予定。1日1本上げることが目標に頑張っていきます。



第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ（前書き）

ソーサリーリングアクションはアビスが一番好きでした。

最近のテイルズはソーサリーリングすら無くなっちゃって少し寂しいです。

## 第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ

「……………みゆ？」

目を覚ました時、まず眼前に広がっていたのは雲で覆われた真っ白な空だった。

ゆっくりと上体を起こし、辺りを見渡す。

「みゆっ！？ こ、ここはどこですのー！？」

周りに見えるのはゴツゴツとした岩石のみ、緑も水もないただ岩だけが存在する山脈だった。

デオ峠と似ているが地形が全く違う。少なくともさっきまで自分の居たチーグルの森ではないことだけは確かだった。

「ミュウはなぜこんな場所に居るのです？ たしかスケルトンに襲われて、必死に逃げて、それからソーサリーリングが光って……って、そうだ！ ソーサリーリングですのー！」

たぶん、事の発端は突然光ったソーサリーリング。

ミュウはソーサリーリングに異常が発生したと考え、リングをまじまじと見つめる。

リングの異常はすぐに発見することができた。

「みゆっ！？ な、なんですかこれはっ！？ リングに付いている穴が増えているのですのっ！」

ソーサリーリング 元々は三つの穴にそれぞれ音素の譜を刻むことにより、様々な能力を発する便利アイテム。

今までもその力で難解なダンジョンを攻略してきた。

ミュウファイアを出すことができる 第5音素の譜。

ミュウアタックを使うことができる 第2音素の譜。

ミュウウイングを広げることができる 第3音素の譜。

そして、更に空洞の三つの穴が追加されていた。装備者のミュウ自身も見覚えがない穴。

よく見ると、リングの形自体も大きく変わっていた。

「まあ、それはそれとして……」

何の問題解決も至ってないが、ミュウは『それはそれ』の一言で片付けた。

ぐう

「お腹が空いたですの……」

全力疾走二回の後に充分なお昼寝（気絶とも言つ）、ここまで事件が揃ったら当然次に来るのは空腹である。

だが、周りに人も居なければ、食料になりそうなものも見当たらない。あるのは岩石の山のみ……

なんて思っていると、後方から誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「みゅうううっ！ 人ですよ！ 人がいるですの……！」

足音の正体を人影だと察したミュウは、大喜びで人影の元へと駆

け寄った。

「すゝみゝまゝせ」

その人影の姿を見て、ミュウは思わず凍り付いた。

先ほどのチーグルの森でもそうだが、ミュウは考え無しに行動を起こす悪い癖がある。

ミュウは声を掛けたことをすぐに後悔した。

「みゅみゅみゅゝっ！　なんでレプリカナイトがこんな所にいるですのゝ！？」

近づいてきた人影の正体は、かつてルーク達を大いに苦しめたレプリカナイトの大群であつた。

レプリカナイト　HPが高い上、攻撃力、防御力も共にバカにならない強さを誇り、弱点も特にない上級部類の魔物。

ルーク達もかつてエルドラントやフェレス島廃墟群にて、こいつにはかなり苦しめられていた。

例えば、先ほどミュウが苦しめられたスケルトンが10匹居たとしても、このレプリカナイト一匹にすら遠く及ばないだろう。

そのレプリカナイトが大群でいるのだ。絶体絶命とはこの状況にこそ相応しい言葉である。

「え……えっと……ですの」

見ている。大勢のレプリカナイト達はミュウの顔をじっと見ている。

背中に冷や汗がダラダラと流れる。その勢いは徐々に増してゆく。

「……りんぐ……はっけん……ほそく……する……」

レプリカナイト達のリーダー(?)らしき者が不意に口を開く。  
単純な単語の羅列だが、さすがのミュウにもその言葉の意味していることは分かった。

レプリカナイト達は一斉に剣を構え、剣先をミュウの方へ向ける。

「みゅっ!? みゅみゅみゅっ!?」

明らかに相手は敵意を示している。敵意を持っていなければ剣を向けるはずがない。

「と、とりあえず……逃げるですの……っ!!」

本日3回目の全力疾走。

だが、当然レプリカナイト達も追ってくる。

ナイト達はスケルトンよりも、そしてミュウよりも速かった。

「なんで最近の魔物達はこんなに足が速いのですの……!!」

今度は大ベそを描きながら一生懸命に逃げるミュウ。  
チーグルは魔物ではないのか？ という素朴な疑問も浮かぶが、  
あえて今はそこに触れないことにしよう。

逃げる最中、ふと前方に今にも崩れそうな大きな岩脈が目映った。

ミュウはそれを見てある打開策を閃いた。

「（そ、そうですのっ！ あの岩脈の根元をミュウアタックで崩す  
ですの。そうしたら崩れた岩石で追跡の足を止められるかもしれない  
ですのっ！）」

ミュウの見解は正しかった。

岩脈は根元を崩すと、いとも簡単に崖崩れが起こる。  
そうすれば確実にナイト達の足を止めることはできるだろう。  
しかしそれはミュウ自身にも危険が及ぶことでもあった。

「（危険かもしれないけど、今はそんなこと言っていられないです  
の！ 覚悟を決めて……せいのっ！）」

ソーサラーリングの第二音素の譜が光る。  
するとリング全体が土色に変色した。

「あた~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~くっ!!」

ミュウアタックを岩脈の根元に向けて放とうとした瞬間、今度は  
リングに連動してミュウ自身の身体も土色に変色する。

こんなの初めてなことであるが、ミュウはそれ以外の所で驚愕することになる。

ドガッシャアアアアアア~~~~~  
ンッー！

「「「……っ！？」「」」

異常な炸裂音が辺りに木霊する。その音に驚き、レプリカナイト達は思わず足を止めた。

ミュウアタックが炸裂した岩脈には、洞穴並の大きな空洞が出来ていた。

今のアタックの威力は明らかに異常だった。  
いつもなら小さな岩を砕くことくらいしか出来ないくらいの威力しかないはずなのに……

みし……みしみし……ピキキ……

ミュウが衝撃を与えた箇所を基点に、岩脈は少しずつヒビ割れが発生している。

そして

ガラガラガラガラガラガラガラガラッ！！

大きくヒビ割れた岩脈は一気に崩れ始めた。

「みゅっ！？ みゅううううっ！」

ミュウの断末魔が響く中、レプリカナイト達は雪崩のように崩れてきた岩石の下敷きとなっていたのだった。

「あ、危なかったですの……」

レプリカナイト達が生き埋めになった現場より遙か上空。

いち早く危険を察したミュウは、咄嗟の判断でミュウウイングを広げ、上空へと避難していた。

「（それにしても、今のアタックの威力は何事ですか？ あんな凄まじい威力、今まで見たことがないですの……）」

ミュウはそんな考え事をしながら、羽（耳？）を羽ばたかせ、適当に思うが俚の方向へ進んだ。

「（やっぱり、ソーサリーリングに何か異変が起きているのですの……そうとしか考えられない）」

考え事の途中で、ふとミュウはある事実気付いた。

「みゅうッ！？ 何でミュウは空を自由に飛んでいるのですの!？」



ミュウの驚愕は当然である。ミュウウイングは本来、『飛ぶ』というよりは、『浮く』だけの力だったのだから……

つまり、上下に移動出来ても左右にはできないという、何とも中途半端な力だったのだ。

しかしミュウは今、自分の思うが侘に空中移動を出来ている。決してただ風に流されているだけとか情けない理由などではない。

「????」

頭にクエスションマークをいくつも浮かべて悩むミュウ。

しかし、いくら悩んだところでプチトマトサイズの脳ミソでは、この難しい見解を導き出すことなどできっこなかった。

だが、ミュウにも一つだけ理解できたことがある。それは自分が一番肌にしたこと……

「ミュウの いや、ソーサリーリングの力がパワーアップしているのです……」

パワーアップしたミュウウイングの力によって、ミュウは楽々と山岳地帯を抜けた。

そして、お腹を空かせながら飛ぶこと数十分、ようやく街らしき景色が見えてきた。

「や、やっと食べ物に在り付けますの〜。長かったですの〜」

街を発見すると、ミュウは大喜びで急降下し、街の入り口の前で綺麗に着地した。

エンゲーブを彷彿させるような美しい農園が広がり、街の中央には噴水広場があるという豊かな街だ。

噴水広場の中央には、なぜか怖い顔をしたおっさんの石造がドーンと聳え立っている。

これさえなければとても好感の持てそうな街である。

早速街へ入ると、住人達による手荒い出迎えが待っていた。

「おい、なんだアレ？ 変な動物がいるぞ」

街の子供の一人がミュウを指差しながら言った。

「本当だ。モンスターには見えないな。サルか？」

「いや、あの顔はブタだろ？」

「サルブタっ！ あいつの名前はサルブタで決定」

ミュウは何もしていないのに、続々と野次馬達が沸いてきた。

「違うですよ！ ミュウの名前はブタザルですよ！」

野次馬が勝手に付けた名前に文句を述べるミュウ。

『ブタザル』というのは主人であるルークがつけてくれた名前。

名前の由来はルーク曰く『ブタとサルを足して2で割ったような顔をしているから』らしい。

そんな真意を知っているのかどうかは知らないが、ミュウはなぜかこの名前に執着している。

「おい、サルブタ……」

「だから違うですよ！ ミュウの名前は」

「これ食つか？」

そう言っただけで差し出してきたのは、レーズン入りのクッキー。

「食べるですよ」

音符マークを付けてまで差し出されたクッキーに飛び付くミュウ。

「サルブタ、これも食べ！」

「喉が渴いたでしょ？ サルブタちゃん、これをお飲み」

何もしていないのに、あちこちから押し寄せる食べ物のプレゼント攻撃。ミュウは頬を緩ませながらそれらを一つ一つ嬉しそうに受け取った。

「サルブタ、何か芸をやったらこっちのお菓子もあげるぞ」

そう言っただけで男の子が差し出したのは、見るからに美味しそうなチョコレート。

「（あ、あれは、チーグルの森で流行っているボール型チョコレート（いちご味）ですよ！ あ、あれは何としてもゲットしたいですよ）」

流行りの品を見るや、ミュウの瞳に小さく炎が上がる。  
決意に満ちた今なら、何でも出来そうな気がしてきた。

「一番、ミュウことサルブタっ！ 口から火を吹くですよ」

『おおーっ！』と野次馬から歓声が上がる。ミュウはこの瞬間、自分の名前に誇りを捨てた。

ミュウは大きく息を吸い込み、力をためる。

ソーサリーリングの第5音素の譜が光り、ミュウの身体全体がリングに連鎖して赤く変色した。

ミュウは上空を見上げ、力を解き放つ。

「ふあいあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
っ！ー！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオツ！ー！ー！ー！

ミュウの口を基点に上空へ放たれた炎は、直径数十メートルの熱波を作り、物凄い勢いとスピードを保ったまま、雲の上へと消えて行った。

「~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

野次馬達は、その炎の威力と規模に圧倒されたまま、硬直した。

「（し、しまったですの……ソーサリーリングのパワーアップのこ  
とすっかり忘れてたですのー！）」

後悔しても時すでに遅し。硬直状態である野次馬達の目は、脅威

のモノを見ているかのように引きつつていた。

「い、以上、ミュウの火吹きでしたの〜」

苦笑いを浮かべながら一礼をするミュウ。

そして、それが起爆となって、野次馬達の停止していた脳が再起動した。

「ば、化け物だあああああああつ！」

「やつぱりモンスターだったんだ！ おい、保健所……じゃない、警備兵を呼べ！」

「この姿は我々を油断させるまやかしに違いない！ きつと正体は火吹き竜か何かだ！」

武器を用意してくる者、兵を呼びに行く者、石を投げってくる者、街人達は一丸となり一匹の共通の敵を前に行動を起こした。

どうやら仲間意識の高い街みたいである。

本来ならば美しい人間愛に満ちている街と言つべきだが、ミュウにしてみればただの早とちり集団でしかない。

まあ、こうなった根源はミュウにあるわけだが……

「みゅうううううううつ！ ち、違うですよ！ 誤解ですよ！

皆さんに危害を与えるつもりは……ふがつ！」

必死に弁解も虚しく、一人の子供が投げてきたボール型チョコレート（いちご味）がミュウの鼻の中に見事命中した。

それに続き、街人達の怒涛の投擲攻撃が押し寄せてくる。

耐久力の低いミュウにとっては、石をぶつけられるだけでも大怪我を負いかねない。

さすがにもうこの場に留まることは不可能と察したミュウは、慌

ててミュウウイングを広げた。

「みゅみゅううっ！ ご、ごめんなさいですの〜の〜！」

悲鳴に近い謝罪の言葉を残し、ミュウは慌てて飛び立ち、街を後にしたのだった。

**第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ（後書き）**

見てくれてありがとうございます！

今更ですけど文章見づらいのかもって思いました。

行間を挟んだ方がいいのかなあ……

その意見も含めて感想も待っています。

### 第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（前書き）

全く関係ないですけど、TOXの長編はまだ執筆に入れていません；

というかようやくプロットの作成に入った段階です。

ミユウの異世界冒険記が終わることに少しは執筆進んでいればいいのですが（汗



### 第3話 やっぱりピンチ!? VS 黒い人

「まったく、ヴァーゲスト様も適当だよな。この世界のどこかにあるソーサリーリングって物を持って来いだなんて……」

怪鳥フレスベルグにまたがり、大空を飛んでいる黒い鎧の男は面倒そうにぼやきながらため息をついた。

黒い鎧、黒い髪、黒いフェイスマスク、黒い槍……黒以外の色が見つからないくらい、全身真っ黒な装備で覆われたデーモン族の男、名はアザゼルといった。

「大体、先に探しに出向いたはずのレプリカナイト達はどこで何してんだよ……あゝあ、面倒くせえ」

男はダルそうに欠伸をすると、ついにはフレスベルグの上で寝転がってしまった。

「『この世界のどこか』ってどれだけ範囲が広いんだっつーの！ 全く……見つかるわけが」

「こんにちは〜ですの」

不意に背後から飛んできた妙な生き物に話し掛けられ、挨拶を交わされた。

「あつ、ども。こんにちは」

アザゼルも寝転がったまま、適当に挨拶を返す。するとその生き物は嬉しそうな笑顔を浮かべ、自分を追い越して空の彼方へと消えて行った。

アザゼルはその方向をボーッと眺めながら、感心したようにこう言葉を漏らした。

「最近のサルは空も飛ぶんだな……」

……

……

……

「……って、サルが空を飛ぶか……っ！」

ガバツと身を起こし、自分のボケに自分でツッコんだアザゼル。

「大体、あのサル。なんで言葉を発することが出来やがるんだ！？俺の知らないうちに最近のサルは喋ることが出来るようになっていたってのか！？」

レッサー　ンダが立つくらいで騒がれるくらいである。

どこかの調教師が話題を集める為にサルに言葉を教えたという可能性も

……

……

……

「……って、んなわけねーだろ！　しっかりしろ、俺！-」

周りにツツコンでくれる者がいないことが、こんなにも寂しいことなのだと認識した瞬間だった。

「そういえば、あのサル……腹に珍しい装飾品を付けていたなあ……まるでリングみたいな……」

……

……

……

「……って、アレがソーサリーリングだあああああああああ  
あつー！-」

アザゼルは慌ててフレスベルグに命令を与え、妙な生き物　ミ  
ユウの去って行った方へ向けて、全速力で追い掛けていったのだっ  
た。

「みゅううう、いつまで経ってもどこまで飛んでも、知っている場所が見えないですの……」

空を飛んでいる時のミュウは、リングの第三音素の譜の輝きと連鎖して身体全体が緑色に変色している。

パワーアップしたミュウウイングの扱いにもようやく慣れてきた様子のミュウ。上空移動はそんなに疲れないのでかなりお気に召したようである。

「……………てええええええつ！」

「みゅ？」

背後に声がした気がした。

今までの教訓から、背後からやってくる人影は自分にろくな結果をもたらしていない。

ミュウは思わず警戒体制に入った。

「まてええええええええええいいつ！ そのサルううううううつ……」

「みゅ？ さっきの黒い人ですの」

正確に言つと、人ではなくデーモンだったりするが、ミュウはそのことに気付いていない。

男の表情からは、何か尋常ではない様子が伺えた。

「ど……う……し……た……で……す……の……？」

まだ距離があつた為、大声を上げて訪ねるミュウ。すると男は

「ソーサリーリングよこせや、オラアアアアアアアアアアつ！  
！！」

「みゆみゆうつ！？」

物凄いスピード、そして物凄い形相で男は近づいてくる。

「みゅうううう~~~~~っ!!」

ミュウは慌てて背を向け、フルスピードで逃走を図った。

「まてええええええつ！！ なぜ逃げるうううううつ！？」

[illegible]

聞く耳持たず、ミュウはウイングのスピードを上げるために全神  
経の力をリングに注いだ。

すると徐々に加速度が上がって行き、やがてミュウウイングのス  
ピードは最高点に達する。

「無視かよっ！……っ！つか、速えっ！メチャクチャなスピードじゃねえか、あのサル！！」

男 アザゼルがまたがっているフレスベルグはすでにフルスピードを保っていた。

しかし、それでもミュウとの差は徐々に開いてきている。

このまま行けば確実に見失ってしまう、そう思ったアザゼルはため息を吐きながらしぶしぶその場に立ち上がった。

「仕方ねえ。面倒くせえが、このまま逃がすわけにもいかねえからな」

立ち上がったアザゼルは両手を前に突き出し、目を閉じながら讃術の詠唱に入った。

「喰らいやがれっ！  
……フレイムバーストっ！」

アザゼルの両手から炎の譜が浮かび上がる。

やがて譜の中心から強大な炎が浮かび上がり、瞬時に形を作った。そして大きな渦と化した炎が、ミュウの後部を目標に猛りを上げる。

「みゆっ！？ みゆうううううううっ！！」

物凄い勢いを保った炎は、ミユウの飛んでいった方角を目指し、風を切って迫ってくる。

慌ててウイングの軌道をずらして回避を試みるが、攻撃に気付くのが遅すぎた。

そして

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンっ！

「みゅうううううううううううう……」

ミュウのウイングの片翼に炎の渦が命中した。

『熱い』というより『痛い』と言った方が感覚的に正解だった。

そして片翼を動かせなくなったミュウは一気に浮力を失い、そのまま森の中へと墜落していったのだった。

「ちっ、直撃は間逃れやがったか……まあいいか、サルは落としたし」

アザゼルはフレスベルグの動きを止めると、ミュウが落ちて行った森をじーっと見つめながらこう呟いた。

「しっかし……落としたのはいいが、この森　いや、樹海だな、これは。これから落ちたサルを探し出すのもまた一苦労だな。面倒くせえ」

どうやらアザゼルの『面倒くせえ』は彼の口癖のようである。

彼の無頓着な性格が口癖になってよく表れている。

しかし、彼は面倒くさがっている割には、結局のところ責務はちゃんと果たすのである。

アザゼルは物凄く嫌そうな顔をしながらも、しぶしぶミュウが落ちて行った付近の樹海へと飛び込んで行った。

「むっ……あれは……」

アザゼルが森へ飛び込んで行く様子を偶然遠目で見ていた女性がいた。

「確か、ヴァーゲストの側近の男……なぜ、このような樹海に……？」

金髪の女性はアザゼルことを知っているような口振りだった。獲物を威嚇するかのような鋭い眼光から、どうも彼のことを好意的には見ていないようだ。

「行ってみるか……」

決意を固めた女性は腰から二丁の譜業銃を取りだし、辺りを警戒しながら深い樹海の中へと足を踏み入れていったのだった。



### 第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今回は短いかもしれませんがこれで終わりです。

明日もたぶんこのくらいの時間に更新します。

#### 第4話 早すぎる再会（前書き）

こんな駄文の小説をお気に入り登録してくれた方がいるようでつ！  
とてもとても嬉しいです。本当にありがとうございます！！  
素直に励みになりました。これからも更新がんばっていきます！

#### 第4話 早すぎる再会

「みゅうううううううううううううううううう……」

アザゼルに討たれたミュウ。悲鳴がエコーとなって響いたが、やがてそれも止んだ。

ドバツシャ~~~~~ンっ!!

「……（ぶくぶくぶく）」

豪快な水音が響く。

不幸中の幸いと言うべきか、落ちた場所は大きな湖の中心部だった。よって、落下によるダメージは小さくて済んだ。

本来ならば大事に至らなかったことを喜ぶべきだが、今のミュウには素直に喜べない理由があった。

「（ぶくぶく）……泳げな……（ぶくぶく）……誰か助け……（ぶくぶく）……ですの……」

必死に足をばたかせ水面に顔を出そうと一生懸命のミュウ。まだ子供チーグルであるミュウは泳ぎ方を知らなかった。

「（ぶくぶく）……こ、根性……（ぶくぶく）……ですの……（ぶくぶく）……何とか岸まで……（ぶくぶくぶく）……」

助けを乞うても誰も来るはずが無いことを悟ったミュウは、何と

か自力で岸まで泳ぐことを試み始めたのであった。

岸までほんの三十メートル程であったが、ミュウには数百メートルの距離に見えたに違いない。

「はあ……はあ……はあ……はあ……、や、やっと岸に辿り付いた……ですの〜」

ようやく地に足を着くことができるようになると、ミュウは水に濡れた犬みたいに身体をプルプル振って水気を飛ばした。

泳げないミュウを救ったのは、例の形が少しおかしくなったソーサリーリングである。

別にまた不思議な力を発したとかそういうわけではなく、ただ単に浮力の働いたリングが偶然浮き輪変わりになり、泳げないミュウでもバタ足のみで岸に辿り付くことができたのだ。

「そ……それにしても今日は厄日ですの〜。怖いモノに追われてばかりですの〜」

スケルトン、レプリカナイト、そしてアザゼル。

今日一日だけでミュウは三度も絶体絶命の淵に立たされたのだ。しかも襲われる度に相手は強い者へと変わってきている。

この後、また何かに襲われたらと思うと背筋がぞくつとする。

「みゅうううう……耳が痛いですの〜……」

先ほどアザゼルの譜術がまともにウイングへ命中していた為、左耳にうつすら黒い傷跡が残っていた。

大事には至らなかったが、その傷口は結構深い。とても再びウイングを広げられそうにはなかった。

当然ながら、ミュウには回復譜術は使えない。それどころか回復アイテムすら携帯していなかった。

「仕方ないですの。歩いて森を抜けるしかないですの」

この場に居ても、またあの黒い男に襲われ兼ねないと思ったミュウは、ケガをした左耳を引きずりながら、よろよろと湖を後にしたのだった。

ミュウの予想通り、その場を離れていった自分と入れ違いに、フレスベルグに跨がったアザゼルが空から降下してきた。

「ちっ、水しぶきの音がしたからここだと思ったんだが……いねえか」

ミュウの運が良かったのか、アザゼルのタイミングが悪かったのか、湖に降り立ったアザゼルの視界にミュウの姿はなかった。

「この樹海じゃ空から探すのは無理だな。しかたねえ、面倒くせえが歩いて探すしかねえか」

そう呟くとアザゼルはフレスベルグから降り、地に足を着いた。相当ダルいのか、肩をコキコキ鳴らし、欠伸を交え、ついには尻を掻きながら、ゆっくりとした足つきで樹海の中へと姿を消した。

ちなみに命令を受けていないフレスベルグは、主人の命が下るまで、いつまでもその場で待機し続けるのであった。

夕日が傾き始める。

この時間になると、この森の植物達はオレンジ色の光を浴びて、黄金色の草花へと変容する。

それは強暴なモンスターですら魅了されるほど、幻想的で、そして美しい光景だった。

その光景を見た者達は必ず何らかの情緒を感じるという。素直に感動する者も居れば、寂しさを感じる者も居る。今のミュウはその後者だった。

この光景はチーグルの森でも毎日のように見れた。いや、チーグルの森でなくてもこの夕日が作る幻想世界は大好きだった。森の仲間達が……共に旅をした仲間達がいつも近くに居てくれたから……

共に感動できる者が常に隣に居てくれたから……寂しさを感じないで済んだから……夕日の景色が大好きだった。

だけど、今のミュウはたった一人。この黄金色の世界にたった一

人でいることを強く実感した。

それと同時に仲間達の存在が、如何に大きいものであつたかを改めて認識した瞬間でもあつた。

「「はあゝ……」」

場の雰囲気にとぐわない『二つ』の深いため息が綺麗に同調した。そしてそれぞれのため息の主達は、肩を並べて交互に愚痴を語り始めた。

「全く、あの黒い人までもリングを狙っていたなんて聞いてなかったですの……」

「全く、ソーサリーリングが動いているなんて聞いてなかったぜ……」

「早い内に安全な場所に避難しないと、また別の誰かに襲われるかもしれないですの……」

「早い内にあのサルを見つけねえと、他の奴に先を越されちまうじやねえか……」

「大体なんでリングが狙われるのですの？」

「ああ、それはリングを見付けたものだけに特別に装置を使わせてくれるというヴァーゲスト様の粋な計らいが」

「「ん？（みゆ？）」「」

………

………

………

「サルうううううううううううううううううつ!!」

「みゅうううっ!? く、黒い人ですの~~~~~っ!!」

幻想的な世界に魅了されていた二人は、この瞬間まで肩を並べて歩いていたことに全く気付いていなかった。

二人のボケが見事に同調した、あまりにも間抜けな再会だった。

「てめえ、いつの間に俺の隣にっ！？」　ちっ、俺に気配すら感じさせないとは……見た目とは違い、なかなかやるようだな！　サルっ！」

慌ててミュウとの間合いを取り、槍を構えて牽制するアザゼル。ちなみに気配を感じられなかったのは、単にアザゼルが夕日に魅せられてボーっとしていたことが原因だったりするが……

「（な、何でこの人怒ってるのです！？ わけが分からないのです  
~~~~~）」

ミュウからしてみれば、アザゼルの言っていることはただの言いかけりである。

事実、ただの言いがかりなのだが、アザゼルの独特な臨戦オーラに圧され、ミュウは反論できずにいた。

目を見るだけでわかった。この男の奥底に見える圧倒的な力が……

オーラを放つ。

六神将やヴァン総長がそうだったように……

しかし、そのオーラを感じていたのはミュウだけではなかった。

「（なんだ？ こいつの奥底に感じる強大な力は？ リングの力がサルの身体に同調してやがるのか？）」

相手は自分を見てこんなに怯えているのに……相手はただの小動物のはずなのに……アザゼルの槍を握る手に汗がにじみ出していた。

「（ちつ、何だかしらねえが、戦うと面倒なことになりそうな気がするぜ……仕方ねえ、こういうのはあまり好みはしねえんだが……）」

何を思ったのか、アザゼルは構えていた槍を背中にしまい、臨戦体制を解いた。

「おい、サルっ！」

「みゅううっ！ ミュウの名前はブタザルですよ！」

「同じようなもんじゃねえか！ キレル意味がわかんねえし！……まあいい。おい、サル！ 俺と戦いたくねえか？」

一見挑発しているようにも取れる言葉、アザゼルはまずミュウに戦意の有無を確かめる質問を投げた。

「戦いたくないですよ」

「即答かよ……まあいい。戦いたくねえんだな」

「戦いたくないですよ」

「（二回言ったっ！？）……そ、そうか……じゃあ、その腹に着け

ているリングを俺によこせ。そうすれば俺もすぐにこの場から消えてやる。お前の命も見逃してやる」

「それは困るですの〜」

ミュウはお腹のリングを『渡してたまるか』と言わんばかりに、小さな手で押さえつけ、大事そうに抱え込んだ。

ソーサリーリングは単に火やアタックを出せるだけのアイテムではない。人と話すための翻訳機変わりにもなっているのだ。

つまりソーサリーリングを失うことは人との意志の疎通が取れなくなるということ……主人やその仲間達とも話が出来なくなるということも意味していた。

「よし、じゃあこうしようじゃねえか」

アザゼルはにやりと口元で笑みを浮かべると、ミュウにある打開策を持ち掛けてきた。

第4話 早すぎる再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

言われるまでもないと思いますが、アザゼルはオリジナルのキャラです。

今、『アザゼル』ってきくと、『〇んですよ、アザゼルさん』の方を思い浮かべてしまう…w
アニメ、よかったなあ。

第5話 魔弾襲来（前書き）

たぶん、僕はこのサイトの仕様を半分も使いこなせていない気がします。

イラストを挿絵みたいに使っているアレはどうやるんだろう……

第5話 魔弾襲来

「サル……お前、俺と一緒にこないか？」

その打開策はミュウにも想定外だった一言。

ミュウが目を見開いて驚くほど意外な一言だった。

「リングを渡したくねえなら、お前も一緒に来ればいい。俺の目的が果たされるまでお前の身柄は保証する。どんな敵からも守ってやるさ」

「みゅみゅうつ！？」

さらに意外なことに、それはなかなか魅力的な提案だった。

今日だけで三回近くも敵に襲われているミュウにとっては非常にありがたいものであり、心強い。

ミュウの心境は今大きく揺らぎ始めた。

この男に完全に気を許したわけではない。

しかし、これ以上この見知らぬ土地で一人でいることは嫌だった。

そして、ミュウの決断は下った。

「分かりま」

「……ホーリーランス！！」

「「……っ！？」」

ミュウがまさにアザゼルに気を許そうとした瞬間、近くの叢から

光の矢を降らす譜術が放たれてきた。

光の矢はアザゼルの右肩に深く突き刺さった。
あまりにも突然な奇襲だったので、さすがの彼も避ける間もなかったのだ。

「くっ！ 何者だ！？」

肩に手を沿え、痛がりながらも、叢にいる奇襲者に呼びかけるアザゼル。

しかし、すでにそこには誰も居なかった。

「みゅみゅうっ！？」

後方でミュウの悲鳴が上がる。

アザゼルは慌てて振り向くと、そこには金髪の女性がミュウを抱え、尋常ではないスピードで連れ去ろうとしていた。

「ちいっ！ させるかよ！ …… 光龍槍っ！！」

アザゼルの黒槍が無光属性の光線を放つ。

突き出された黒い光線は、奇襲者の後部目掛けて真っ直ぐ発射されていた。

しかし、奇襲者の次なる譜術詠唱はすでに唱え終えられていた。

「レイジレーザーっ！」

奇襲者の右手から、前方に貫通する眩い光線が発射された。

無光属性と光属性の光線同士がぶつかり、共に威力を中和し合う。
そして、ほんの一瞬だが爆発的な光が辺りを照らし散らした。

バンッ！ バンッ！

光に目を取られていた隙に、二つの銃声が鳴り響いた。アザゼルは自分が撃たれたと思い、即座に身構えるが、自分の身体には特に『撃たれた』という反動はこなかった。

変わりに

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ッ！

自分の左右に聳えていた二本の木が自分を挟むように倒れてきた。絶大な威力を誇る二丁の譜業銃から放たれた弾は、腐りかけていた木の根元を燃やし、アザゼルの頭頂へと倒れこむように仕向けたのだ。

まさに計り知れない銃の腕と、物理法則を瞬時に計算できる頭脳を掛け合わせた見事な攻撃だった。

ズガ

ンっ！！

豪快な音を立て、根元を焼かれた二本の木は、アザゼルを下敷きにして彼を挟むように倒れたのであった。

「みゅ~~~~~~~~うっ！ みゅっみゅっ！ みゅみゅ~~~~~~~~
~~~~~~~~ううっ！」

いきなり連れ去られたミュウは、金髪の女性の信じられないほどスピードを保った激走に、目を回しながらひたすら悲鳴を上げまくった。

「静かにしろ！ さっきの奴にこの場所が気付かれるだろうがっ！」

金髪の女性に叱咤を受け、少し静かになるミュウ。

それでもジェットコースターみたいな激走には悲鳴を上げそうになる。

女性は先ほどの攻撃でアザゼルを仕留めきれていないことを前提みたいな表現をする。

彼女は彼の実力をかなり高い評価で見ているらしい。

ようやくジェットコースター感覚に慣れてきたミュウは、ここで初めて女性の顔をちらっと見た。

「……っ!？」

そこにはとても意外な、そして懐かしい人物の顔が在った。

「あゝ、いてえ。思いつきり頭打ったじゃねえか」

二本の木に下敷きになったはずのアザゼルは、まるで何事もなか



ったかのように木を払い除け、脱出に成功していた。

しかし、その表情には危機迫る雰囲気を漂わせており、明らかに怒りを奮闘させていた。

「あの女、絶対許さねえ。おい！ フレスベルグ！ 空から追跡するぞ！」

……………しゅん。

「おい、フレスベルグ！？ てめえ、聞いているのか！？」

……………

……………

……………

「……………って、あゝっ！ フレスベルグを湖に置いてきちまったああああああっ！！」

今の今までフレスベルグが傍にいなかったことに気付かなかったアザゼル。

フレスベルグは今も湖で彼の帰りをいつまでもいつまでも待っていることだろう。

「よしつ、ここまでくればさすがの奴も私達を見つけられまい」

女性はあるから約1時間弱、休憩無しに樹海の出口付近まで走り続けた。

女性とは いや、人間とは思えない程の体力の持ち主である。しかも本人は終止涼しげな表情を崩さず、疲れた様子を一切見せていなかった。

女性とミュウは出口近くの洞窟に身を潜めている。

仮にアザゼルが空から追跡したとしてもこの場所なら見つかることもないだろう。

「なんで……なんであなたがこんな所にいるのですの？」

ミュウにしては珍しく真剣な表情で、女性に質問を掛ける。

「そんなことよりもお前、そのリング」

「今はこっちが質問をしているのですのっ！！」

更に珍しいことに今度は叱咤するミュウ。

ここまでシリアスなミュウは果たして年に何回見られるだろうか？

「分かった、先に質問に答えよう。あの黒装の男は、私が今調べている重要参考人の一人なのだ。そして、先ほどあの男が森に入って行く姿を見たもので……気配を消して後を」

「そうじゃないのですのっ！」

バチンバチンと、小さな手で地面を叩いて苛つくミュウ。  
どうやら彼の聞きたいことは別にあるらしい。

「どうして死んだはずのあなたが、こんなにピンピンして生きているかを聞いているのですの〜!」

.....

.....

.....

「..... お前っ、ティア達と一緒にいたチーグルではないか!」  
「今更気付いたのですの!?!」

女性はようやくその事実気付くと、初めて表情を崩し、驚きを見せた。

「なぜ、お前がこんな所に?」

「だ〜か〜ら、今はミュウが質問しているで〜す〜の〜っ!」

お互いに聞きたいことが多すぎて混乱を招いている。  
そして、ついにミュウが叫んだ。

「だから、何で死んだはずのリグレットさんが生きているのですの〜っ!?!」

## 第5話 魔弾襲来（後書き）

見てくれてありがとうございます！

次回から後書きでちよこちよこつとスキット（TOAではフェイスチャットだっけ？）を入れていきます。ちよつとしたお遊びみたいなものです。

## 第6話 グラン・ソウル（前書き）

世界観の説明とリグレットのツンデレ回です。

世界観の方は5秒程度で思いついた有りがちすぎる設定です。

なんかのアニメでこんな設定の世界があったなあ……題名忘れたけどw

## 第6話 グラン・ソウル

ローレライ教団兵『神託の盾騎士団<sup>オラクル</sup>』の幹部『六神将』。

並外れた実力を持つ六人で構成され、その個々の力は圧倒的であった。

皆、それぞれに思念を抱き、過去にルーク達と何度もぶつかり  
そして破れた。

そして、この『魔弾のリグレット』と称された女性も、栄光の大地エルドラントにて、過去の教え子であるティアと価値観を噛み合わせぬまま敗北し、命を落とした　　はずである。

「お前、この世界のこと何もしらないのか？」

「みゆうっ！ ミュウだって世界のことくらい知っていますの！  
この世界はオールドドラントと言って、キムラスカ国とマルクト国  
を中心に平和を守っているのですの」

かつては平和条約で結ばれていた二国は、表面的だが友好を保っていた。

しかし、ある事件をキツカケにその平和条約は解消され、対立国  
として永きに渡ってきた。

だが、ルークを筆頭にその仲間達の提案で、再び同盟は結ばれた。  
今度は表面だけの友好ではなく、互いに手を取り合い、永久に協  
力し合う誓いが交わされ、オールドドラントに更なる平和が訪れた。

ミュウの説明はものすごく手抜きではあるが、言っていることは  
間違っていない。むしろミュウにしては博学な言葉を口にした方だ  
ろう。

だが、リグレットはミュウの解答を聞いて、なぜか深くため息を

吐いた。

「なるほど、何も分かっていないみたいね」

「みゅみゅっ!？」

いともあつさり自分の意見が覆され、驚き半分、へこみ半分のリアクションを返すミュウ。

そしてリグレットは更に驚きの事実を述べ始めた。

「この世界はオールドドラントではない」

「チーグル、お前は人が死した後、どこへ行きつくと思う？」

不意に放たれた質問、それは哲学の域を越した高度な質問。そして、誰もが知りたいことでもあった。そ

ミュウは眉を寄せ、『むむむ』と唸りながら、じつくりと自分なりに考えをまとめ……答えた。

「火葬場ですの」

なぜか嬉しそうに答えるミュウ。

その解答を聞いてリグレットは一瞬コケそうになる。

「そうじゃなくて……いや、その通りなのだが………し、質問を変えよう」

リグレットはゴホンッと咳払いを入れ、間を作ると、改めてこう質問をした。

「人が死に、肉体を離れた魂の行き付く場所、それはどこだと思う？」

博識なリグレットとしては非常に分かりやすく質問したつもりだが、ミュウにはそれでも質問の主旨が理解できていなかった。

「墓地ですの」

二度目のミュウのボケ解答に、リグレットは鎮痛の表情を浮かべる。

結局彼女はミュウの言葉はスルーして、話を先へ進めることにした。

「……つまり、この世界は生前に思念を果たせなかった魂が行き着き、生前の肉体へと再構築される場所、それがこの死霊世界『グラ・ソウル』よ」

「……………みゆ？」

長い間の後、ミュウは思考の末、結局首を傾げた。

まだよく分かっていないみたいである。

その反応に、非常に疲れた表情でため息を漏らすリグレット。

「もういい。つまり、この世界は異世界なの。今はそれだけ覚えてもらえばいいわ」

結局の所、ミュウにも分かるように簡単な説明で済ますリグレッ



ト。

その口調にはいつもの堅苦しい軍人らしさは見えず、素のリグレットを映し出していた。

「みゅううつ。よく分からないけど、わかりましたですの」

「（こ、ここまで簡単に言っても分からないとは……）」

どうやら博識なリグレットにとって、ミュウという存在は苦手意識を持たせる相手らしい。

久方ぶりにどつと疲れたリグレットは、岩の壁に背をあずけ、しばらく火の番に集中することにした。

日は完全に沈み、夜の深い闇の中、静寂と獣の咆哮が交互に樹海の音帯を支配していた。

ミュウ一人だったら怯えて震えていたかも知れない。

しかし、今のミュウにはその恐怖感に襲われることはなかった。

「チーグルよ。勝手に連れさらってきてしまった手前悪いのだが、お前を『モーヴ』という都市に連れて行きたいと思う。こっちの勝手な都合だが」

「分かったですの　リグレットさんに着いて行くですの」

リグレットが話を言い終える前に、ミュウは即了承を下した。

この反応にはさすがに意外だったのか、リグレットは目を見開いて、驚きを表情に出していた。

そしてリグレットはずっと気になっていたことを聞いてみることにした。

「お前、なぜ、かつて敵だった私を見ても警戒しない？ アレだけお前達の行く手を阻んできたというのに」

そう かつてルーク達と六神将は互いに剣を交えた宿敵同士、つまりミュウとも敵対関係であったはず。

なのにミュウは警戒する所か、完全に心を開いていた。

ミュウはリグレットと真っ直ぐ向き合うつと、笑顔を向け、心意を述べ始めた。

「ティアさんが言っていたですの。リグレットさん本当はとても強く優しい人で、最も自分が尊敬している人だって」

「ティアが……？」

「ミュウもそう思うですの。リグレットさん、とってもとっても優しいですの。」

屈折の無い笑顔で本心を述べるミュウ。

リグレットはその言葉を聞いて、少しだが頬を赤らめた。

「なっ……わ、私がいつお前に優しくした！？ 心にも思っていないことを言うなっ！」

「そんなことないですの。リグレットさん、ミュウに一生懸命この世界のこと教えてくれたですの。」

「その割には全然理解していなかったではないか！ も、もういい！ 寝るぞ！ 明日は早いんだ！」

なぜ明日『早い』必要があるのかは全くの謎だが、リグレットはミュウに背を向けるとそれっきり黙りこくってしまった。

ミュウはそんなリグレットの様子を見て一瞬微笑むと、その場にゴロンと転がり、すやすやと寝息を立て始めた。

久々にミュウに与えられた安らかな時間。

背中に感じられた安らかな温もりは、決して気のせいなんかではないだろう。

朝日が登り、森に咲く草花に太陽の光が降り注がれる。

朝の森は自然の賛歌のように澄みきった水のせせらぎの音がよく聞こえて来る。

リグレットはその音が目覚ましとなって、ゆっくりと眠りから覚めた。

彼女は髪を束ねながら、ちらつと横目で隣で寝ているミュウの姿を見た。

「（ヴァーゲストの側近の男は明らかにソーサリーリングを狙っていた……なぜだ？　なぜアレほどの男がこんなリングなんかを欲しがるのだ？）」

しばらくじーっと見つめていると、ミュウは一つ寝返りを打つ。すると、ミュウの左耳に黒いアザがあるを見付けた。

「（なんだ？　ケガをしているではないか……あの男にやられたのか？）」

目に飛び込んできたのは、空中でアザゼルからフレイムバーストを受けた時にできた傷跡だった。

一日で痛みは引いてきていたが、火傷の跡はこうしてくっきりと残されていた。

髪を束ね終えたリグレットは自分のカバンの中をこそこそ漁り始めた。

その時、ミュウも静かに目を覚ました。

「みゅーうー、おはようですの〜」

「目が覚めたか。おい、ちょっとじっとしている」

「みゅ？」

リグレットの促された通りにミュウはその場でじっと固まってみた。

カバンから包帯と薬を取り出したリグレットは無言でミュウの左耳の傷に手当てを始める。

「みゅみゅっ？ 手当てしてくれるのですの？」

「じっとしてると言っただけ、口も動かすな」

リグレットの手当ては動きに無駄がなく、尚且つ丁寧な治療だった。

こう言った治療は慣れているのか、わずか数秒で完璧な包帯の形が出来上がった。

「みゅみゅーう、ありがとうございますの〜。やっぱりリグレットさんは優しいですの〜」

「ち、違う！ その汚らしい傷跡を自分の視界から消したかっただけだ！」

明らかに照れ隠しが混じった言い訳を述べるリグレット。頬もほんのり赤い。

ミュウが改めてリグレットの優しさを感じた朝の一時だった。

「モーヴはこの森を出て真っ直ぐ西に行った所にある……が、ここは南の平野を迂回して遠回りしながら向かう」

身支度を済ますと、リグレットがこれからの予定は簡単に話した。

「みゅ？ 真っ直ぐ向かわないのですの？」

「ああ、ちょっと調べたいことがあるものでな。なるべくたくさんの町へ寄って情報を集めたい」

「わかりましたですの～ さっそく出発ですの～」

話がまとまった所でミュウが先導して歩き始める……が、リグレットが冷静に待ったを掛けた。

「チーグル、森を抜ける道知っているのか？」

リグレットのその質問に、ミュウは極めて明るくこう答えた。

「知っているわけではないですの～」

「笑顔で言っな！ 森は、ここから西に進めば抜けることが出来る」

「みゅみゅ～うっ！ 西！ 分かったですの～」

と、言いながら方向を変え、再び歩み出すミュウ。

……が、リグレットが再び待ったを掛ける。

「そっちは北だ！ 言ってる傍から間違えるな！」

「みゅみゅうっ！ てことは西はこっちですよ」

「そっちは南っ！」

「みゅ、驚事実ですよ。北の反対は西ではなかったですよ」

驚愕を示しながらもミュウは再び別の方向へと歩み始める。

当然リグレットは待ったを掛ける。

「だからそっちは北だと言っているだろうが！ お前わざと間違えてないか！？」

「みゅううう……この世に西が見当たらないですよ」

「お前が異常に方向音痴なだけだ！ もういい、お前は私が担いで行く、もう勝手に歩くな」

リグレットは一人オロオロしているミュウをひょいと拾い上げると、そのまま頭に乗せ、真っ直ぐ西へ向かって歩み始めた。

するとミュウは泣きそうな顔をしながら申し訳なさそうにこう言った。

「リグレットさん……」

「もういい、別にさっきのことは怒っていたわけでは」

「……後ろ髪がチクチク刺さって痛いですよ」

「そのくらい我慢しろっ！」

「みゅううっ」

リグレットに叱咤を受け、ミュウは彼女の後ろ髪の子クチク攻撃

に耐えながら大人しく悶えるのであった。

「ところでリグレットさん、そのモーヴって所には何かあるのですの？」

ようやくチクチク感覚に慣れてきたミュウは、今更ながらその質問を繰り返した。

「ああ、そこに我らが拠点にしている神殿がある。そして何か分かったらそこでラルゴと合流することになっている」

「誰ですの？ その人」

あまりにも酷いミュウのボケに、リグレットは思いっきり足を捻りコケそうになった。

ミュウが彼女の頭から落下しそうになるが、リグレットが慌てて空中キャッチをする。

「私と同じ幹部六神将だった黒獅子ラルゴだ。巨漢で大鎌を持ってた……」

鎮痛な表情のリグレットの説明に、ミュウは手をポンツと叩いた。ようやく思い出したみたいである。

「思い出したですのー あの大きくて地味な人ですのー」  
「（どういう覚え方を……）」

どうやらミュウに取って黒獅子のラルゴの存在は、ただの『大きくて地味な人』としてしか認識されていなかったようだ。

「みゅみゅっ！ 森の出口が見えてきたですの〜」

ミュウの言う通り、前方には生茂る草木の終点となる地平線が見え始めた。

しかし、リグレットの瞳には、その異常な視力の良さから、地平線の先にあるものまで映し出されていた。

「ちっ、敵はあくまでも私達をこの森から出したくないらしい……」

リグレットが見たその先には、数十匹のレプリカナイト達が森を囲むように周りを徘徊する姿が在った。



## 第6話 グラン・ソウル（後書き）

「スキット」 【お前の名前は？】

リグレット「そういえばチーグル。お前の名は何というのだ？」

ミュウ「ミュウですの〜」

リグレット「……そのまんまね」

ミュウ「みゅっ！？」 でもでもご主人様が着けてくれた名前もちやんとあるですの〜！」

リグレット「いや、別に聞きたくもない。これからは『ミュウ』と呼ばせてもらうことにする」

ミュウ「みゅうっ！ ひどいですの〜。もう一つの名前はとってもとっても格好良いですの〜」

リグレット「（はあ〜……）分かった、念の為に聞いておこう。あのレプリカが着けた名前は何か？」

ミュウ「『ブタザル』ですの〜」

リグレット「……………やっぱりミュウと呼ばれてもらうことにするわ」

## 第7話 魔弾炸裂（前書き）

今回は初の戦闘回です。

第1話でミユウとスケルトンが戦っていたけど、あれはまるで戦闘になっていなかったのw

## 第7話 魔弾炸裂

アザゼルは笑っていた。

不敵に……鋭く

勝ち誇ったように……黒く

「くつくつくつ。あのサルと女、このままこの俺がたやすく逃がす  
とでも思っなよ」

一人、アザゼルは樹海の深部で大岩に腰を掛けて笑う。

「今頃は出口付近で予め呼び寄せていたレプリカナイトの大群を見  
て動揺しているだろうな……くつくつくつ……」

周りに誰も居ない森の深部で、男は不敵に独り言を漏らしながら  
笑っていた。

その光景は余りにも不気味な為、周りにいた獣達も引いてしまっ  
ている。

「そして奴らの姿を見つけ次第、ナイト達の報告を受け、俺がフレ  
スベルグに乗り、その場に直行する……くつくつくつ……抜かりの  
ない完璧な作戦だな」

………

………

………

「俺がフレスベルグと無事合流できていたら……の話だな」

アザゼルの顔には満遍なく疲労の色で塗りつぶされていた。  
リグレットの奇襲を受けた後、彼は自分の足跡を頼りに湖を目指したのだが、なぜか湖には辿り付けず、そしてどんどん樹海の迷宮へとハマって行った。

アザゼルの方向音痴ぶりは、まさにミュウと負けず劣らずといった感じだった。

「俺……これからどうしよう……」

誰も居ない樹海の深部……そこには一人で途方にくれる馬鹿な男の姿が悲しく映し出されていた。

そして、フレスベルグは今日も湖で主人の帰りを待つ。

「みゅううう。リグレットさん、どうするのですの〜？」

ミュウ達はナイトに見つからないように近くの叢に身を隠しながら静かに様子を伺っていた。

徘徊しているナイトの数は半端ではない。この様子だと隙を見て脱出を図ることも不可能だろう。

「恐らく、奴らが私達を足止めしている間に、あの黒い装備の男が空からこの場へ直行してくる……たぶんそという戦法ね」

さすがに鋭いリグレット。完全にアザゼルの仕組んだ戦法を読みきっていた。

しかし、さすがの彼女もアザゼルがフレスベルグと合流出来ていないことまでは想定していなかったみたいである。

そこまで想定できたらエスパーだが……

「レプリカナイト達に加えて、あの黒い装備の男まで合流されたらもうこちらに打開策はない」

「みゆみゆうっ！？　じゃあどうしようもないですよ！？」

「いや、『合流されたら』の話よ。レプリカナイト達だけなら……むしろは黒い装備の男一人だけならまだ対処できる見込みはある」  
「みゆ？　どういうことですか？」

リグレットの言葉の真意が理解できないミュウ。

いや、そもそも考えることは全てリグレットに任せていた為、自分で考えようとすらしていなかった。

「つまり、ここは正面突破で切りぬけ、出来るだけ遠くへ逃げる。空からの追跡には追い付かれるだろうが、ナイト達さえ撒ければ最悪でも奴との一対一の状況くらいは作れるだろう」

かなりの大胆な策にミュウは呆気に取られる。

しかしあの博識なリグレットが考えたことであるのだから、もう他に良策はないのだろう。

「この場合はスピードの勝負よ。如何に早くここを切りぬけられるか……ぐずぐずしていると遠くへ逃げる前に奴と合流されてしまうからな」

リグレットはミュウを再び頭へ乗せ、スチャッと音を立てながら両手に譜業銃を構えた。

「ミュウ！　しっかり掴まっているのよっ！　お前が振り落とされたら元も子もないのだからなっ！」

「みゅみゅぅっ！　了解ですのっ！　絶対に振り落とされないですのっ」

ギュッとリグレットの頭にしがみ付くミュウ。

リグレットの気迫につられるように、彼の目も真剣そのものだった。

「よしっ！　いくぞっ！！」

その声を合図に、リグレットは叢から飛び出し、森の出口へ向けて一目散に走り出した。

「クラスターレイドっ！」

広範囲の地属性譜術が突然レプリカナイトの群がっている地点の足元に炸裂した。

「「「……っ！？」「」」

慌ててナイト達はその譜術が放たれた根先の方へと振り返る。

そこには物凄いスピードでナイト達の包囲網へと突っ込んでくるリグレットとミュウの姿があった。

ナイト達は標的を発見すると、即座に続々とその場に集結してくる。

その数はざつと五十は超えていた。

しかし、リグレットはそんなことお構いなしに突っ込んだ。

バンバンバンバンバンっ！

目にも止まらぬ早撃ちで正確にナイト達の急所を打ち貫く。

銃の威力が凄いのか、彼女の腕が凄いのか……攻撃を受けたナイトは一撃で地に伏せてゆく。

そして彼女の次なる譜術が唱えられた。

「エクレールラルムっ！」

ナイト達が集結してきた所を見計らって、十字の金光から光属性の光熱を放つ譜術を炸裂させた。

範囲もそこそこ広く、威力もあるので非常に使いやすい譜術。

これにはさすがに敏速のナイト達でも避け切れず、次々に光熱に溶かされていった。

威力があり正確に狙いを定めて敵を打ち貫く射撃と、隙の無く状況に適した判断で放たれる譜術、この二つをかね揃えたリグレットに、ナイト達は彼女に攻撃を与えるどころか、触れることすら出来ずにいた。

「みゅみゅっ！ さすがリグレットさんですの〜 爽快ですの〜」

そしてミュウは、パワーアップしたリングの力を借りて一緒に戦う……と思いきや、ただリグレットの頭の上で何とも言えない爽快感を味わうのに夢中になっているだけだった。

リグレットはそのまま森の出口を掛け抜けた。ナイト達は彼女のスピードに着いて来れていない。

近接攻撃しか出来ないナイト達にとって、相手にスピードで負けてしまうと何もやりようがないのだ。

このままなら無傷で森を脱出できる！ そう思った矢先

「……っ!？」

前方にはすでに譜術を唱え終えたレプリカルーンの大群が待ち構えていた。

レプリカルーン レプリカナイトよりも体力、耐久力では劣るが、譜術攻撃力は半端なく強い。

まさに超一流譜術者と変わりない戦闘力を持つといっても過言ではなく、ある意味ナイトよりも厄介な相手。

ただし、その譜術詠唱中には大きく隙が生じるため、譜術が放たれる前に倒せばそんなに苦戦しない相手でもある。

……だが、目の前のルーン達はすでに詠唱が唱え終えられていた。



「『イラプションっ！』」

レプリカルーン達の言葉が重なり、そして一斉に放たれる炎の譜術。

「くっ……」

渦状の火炎譜術が真っ直ぐリグレットを目掛けて飛んでくる。

バンバンバンバンっ！

リグレットはその火の渦に向けてひたすら早撃ちを繰り返す。すると放たれた弾とぶつかった火の渦は、互いの威力に相殺され、次々に効力を失う。

相殺しきれなかった火の渦は何とか眼前で交わり、丸焼けにならずに済んだ。

想定外の相手を前にしても冷静な判断を失わず、リグレットはその攻撃全てを華麗に対処する。

後ろからはナイト達が追ってきている為、立ち止まることは出来ない。

リグレットはそのままレプリカルーンが群がっている前方だけを向いて、スピードを落とすことなく突っ込んだ。

ルーン達は譜術の再詠唱に入るが、それが唱え終わられる前にリグレット譜術が先に完成した。

「クラスターレイドっ！」

最初に放った譜術と同じものをルーン達の足元に炸裂させる。先ほどは奇襲用に放ったのだが、今度は攻撃用に討つ。

耐久力の低いルーンには威力の弱いこの術でも効果は抜群だった。

地属性譜術の激流に、ある者は詠唱を止められ、ある者はそのまま地に伏せてしまう。

耐久力がないにも程が感じられる体たらくだった。

しかし、如何にこの術が範囲広しと言えど、すべてのルーン達を撒き込めたわけではない。

攻撃に撒き込まれなかったルーン達は、そのまま詠唱を唱え続けていた。

リグレットは再び銃を構え、また譜術を相殺する姿勢を見せたまま走る。

ぐいっ！

「……っ!？」

しかし、地に伏せていたレプリカルーンの一匹が不意にリグレットの足を掴み、彼女の体制を崩させた。

「『イラプションっ!』」

その瞬間、ルーン達の譜術攻撃の第二派が一斉に放たれた。

## 第7話 魔弾炸裂（後書き）

「スキット」      【応援？】

リグレット「はあっ！ エクレールラルムっ！」

ミュウ「（もぐもぐ）……みゅみゅぅ！ リグレットさん、さすがですの〜」

リグレット「食らえ！ ホーリーランスっ！」

ミュウ「（もぐもぐもぐ）……強いですの〜      リグレットさんは最強ですの〜」

リグレット「そこだ！ クラスタレイドっ！」

ミュウ「（もぐもぐもぐもぐ）……でもティアさんと技が被りすぎているのが……（もぐもぐ）……少し残念ですの〜……」

リグレット「……………ミュウ」

ミュウ「みゅ？ 何ですの？」

リグレット「何を……しているんだ？」

ミュウ「何って……（もぐもぐ）……応援ですの〜」

リグレット「菓子を口に含んだままか？」



## 第8話 たった一発の攻撃で（前書き）

土日は日中更新ができます。平日は夕方・夜限定ですけれど。





った。

森を脱出してから数十分、リグレットはようやく走りを止め、一息吐いた。

それでも疲れた様子は見せていない。相変わらずとんでもない体力の持ち主だ。

「ここまでくればナイト達の追跡の心配もないだろう」

「みゅーう！ さすがリグレットさんですの、レプリカナイト達の姿がもう全然見えないですの」

「（……すごいのは私ではなく、お前だ）」

ミュウは気付いていなかったが、彼の放った炎が威嚇効果を放っていた。

たった一発の攻撃で完全にナイト達の追跡意欲を失せさせていたのだ。

よって今回の立役者はリグレットではなくミュウであった。

「（ヴァーゲストがリングを欲しがる理由が少し分かった気がする……）」

あの炎の威力は六神将のリグレットですら驚愕するものだった。それほどリングに絶大なパワーが秘めていることがはっきりした。

「みゅーう、それにしても黒い人はどうしたですの？ 追っかけ



てこないですよ」

ミユウは澄み渡った青い空をキョロキョロと見渡しながら言う。

「ああ。だが奴がこのまま我らを易々と逃がしてくれるとは思えない。いつでも万全の体力で戦えるようここからは警戒しながら歩いて行こう」

リグレットならもう一時間くらい走ったところで万全な体力をキープ出来そうな気もするが、念には念を込めて……と言うことだろう。

ミユウ達はそれからずっと周りを警戒しつつ、南に位置する街を目指すのだった。

一方、その話題になっている人物はと言うと……

「そういえば、どうやってナイト達から報告を受けるつもりだったんだ？ 俺」

樹海の更に深部へと歩み続けているアザゼルは、ふとそんな疑問を口に出していた。

アザゼルからナイト達へは念話で通ずることは可能だが、ナイト達からアザゼルへは……

「ダメダメだな……俺」

一人、卑下し落ち込むアザゼル。  
彼がダメダメだってことくらい、今更言われなくても皆分かっていることだった。

ぐうゝ

フレスベルグは今も湖にてお腹を空かせながら主人の帰りを待ち続けている。

リグレットとミュウは澄み切った満天の青い空をじーっと見つめ、  
呆然としながらそれぞれ呟いた。

「……追いかけてこなかったな」  
「……追いかけてこなかったですの」

ずっと警戒しながら歩くこと小一時間、特に異変が起こらぬまま  
街の見える景色の場所にまでやってきた二人。  
拍子抜けとはまさにこのことである。

「必ず追いかけてくると踏んでいたのだが、何を考えているのだから……  
あの男の真意が読めないわ」

アザゼルのポケ行動がリグレットの心中に大きな混乱を招いていた。

真意が読めないのも当然である。  
彼自身予測できなかった事態が、進行形で本人を襲っているのだから……

「首が痛いのですの」

ミュウが首をコキコキ鳴らし辛そうな顔を見ると、そのままリグレットの頭の上で倒れ伏せた。

小一時間ずっと空ばかりを見上げていたので首筋に痛みが生じるのも無理はない。

肩が凝ったのはリグレットもまた同じだった。

「とりあえず街へ入って先に宿を取ろう」

リグレットの提案にミュウも無言で頷くと、二人はゆっくりとした赴きで街の門の方へと向かった。

## 第8話 たった一発の攻撃で（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それとお気に入り登録、評価を付けてくれた人ありがとうございます！

こんなにもPVが増えるとは思わなかったので、とても感動しております。

これからモチベーションを保って、更新頑張れそうです。

## 第9話 おっかないおっさんの像（前書き）

お昼に更新する予定でしたが、少し用ができてしまい、いつもの時間の更新になってしまいました。

そしてサブタイトルがだんだん適当になってきた気が……（汗

## 第9話 おつかないおっさんの像

自由の街『リーム』。

この街の特徴は表と裏がハッキリと分かれている所だろう。街門がある南側の道が表通り、その反対の路地が裏通り。

表通りは農園や雑貨店など仕事に真面目な人間が集まり治安も非常に良い。今も子供達が元気に走り回っている。

しかし、問題なのは裏通り、ぎっしりと敷き詰められたように並ぶ建物は、酒場や博打施設など事業店が大半を占めている。

店間の競争が特徴的だが、お世辞にも治安が良いとは言いがたい。治安が悪くなれば店間の嫌がらせが始まったり、柄の悪い客が店の中で暴れたりと人生に暴落した人間が群がっていることが多い。

ミュウ達は今、表通りを歩んでいる。

しかし、なぜか彼らに街の住人達の視線が集中していた。

「みゆみゆ？　なんか見られている気がするのですの〜」

視線に気づいたミュウが辺りをキョロキョロしながら不思議そうに顔をしかめた。

対するリグレットはそんな視線など気にせず、平然とした表情を崩さぬのまま真っ直ぐ前だけを見続けている。

「ああ、なぜか私が入通りの多い街を歩くといつも視線が集中するのだ。まあ軍服を着たまま街の中へ入ったりしたらこの反応も当然だろう」

「みゆみゆ〜う、なるほどですの〜」

リグレットの言葉に納得するミュウ。

では、ここで少し街の人達の心の中を覗いてみよう。

「（か、可憐だ……）」

「（あんな美人……今まで見たことがない）」

「（声かけちゃおうかなあ。ああ、でも遠くで見ているだけで幸せかも）」

視線の真意はそんな所だった。

妙に肌を露出している軍服に見えない軍服、長身でハイソックスにミニスカを履いた金髪美女。

こんな女性が堂々と街の中など歩いていたら視線が集まるのは当然の成り行きだった。

そんな自覚など微塵に感じていないリグレットは、これから街の中を歩く度に視線を集め続けることだろう。

宿の予約を取り、しばらく自由行動ということになったが、ミュウは別段することがあるわけでもなく、そのままリグレットの頭の上に居続けた。

チクチク感覚にも完全に慣れたミュウは、ここがお気に入りの場所になった様子である。

しばらくリグレットの頭の上でゴロゴロしていたミュウは、ふと前方にみたことのある造物を発見した。

「みゆみゆ？ あの怖い顔の石造、見たことあるですよ」

目の前に飛び込んできた光景は、ミュウが前に立ち寄った街と同じように噴水の中央に堂々と聳え立つ怖い顔のおっさんの石造だった。

威厳のある容姿に二メートルを越す巨体、良い言い方をすると赴きのある風体とも思えるが、ミュウにしてみたら、やっぱりただの怖い顔のおっさんだった。

するとリグレットは石造を威嚇するように睨むと、この石造の人物の正体について語り始めた。

「……この男はヴァーゲストという名の男だ」

「みゆ？ ヴァーツラ」

「違う！ その間違い方だけはするな！」

すっかり別タイトルの敵キャラの名を言いそうになったミュウの口を慌てて塞ぐリグレット。

ゴホンッと咳払いを一つ入れて気を取り直すと、リグレットは再び語りを続けた。

「簡単に言つとこの世界の支配者よ。お前を襲っていた黒い装備の男も奴の仲間だ」

「みゆ？ つまり王様ってことですよ？」

「……違うな。王と支配者では全然意味合いが違う。奴はこの世界の均衡を崩そうとしている。言わば革命者だ」

リグレットの表情が更に曇って行く。どうやらリグレットはヴァーゲストという男に対して嫌悪を抱かなければならない事情があるようだ。



実は彼女、この街へ寄った目的はこの石造の人物、ヴァーゲストの動向を探る手がかりを集める為だった。

「……………みゆ？」

一方で全く理解出来ていなかったミュウ。

彼にしてみたら少しでも難しい言葉が出てきた地点で、アウトらしい。

「もういい、詳しいことは『モーヴ』に着いてから話すとしてよう。今は情報収拾が先だ。裏通りへ行くわよ」

石造であろうとヴァーゲストの顔は見たくないのか、リグレットは早足でその場を去って行く。

表通りに聳える一つの石像。

しかし、のどかな街並みの風景には余りにも場違いな雰囲気を放っていた石像だった。

表通りを抜けると、明るかった雰囲気が一転し、昼だというのに異様な暗さを放つ暗黒街が姿を現す。それがリームの裏通りだ。

道端で寝ているもの、酒を飲んでいるもの、喧嘩を始めて殴り合っているもの……世の中の墮落者が集結した光景としては当然のものかもしれないが、やはり見ていて気持ち良いものではない。

ミュウはリグレットの頭の上で丸くなって怯えているが、対する

彼女はそんな風景に気を止めようともしせず堂々と歩んでいた。

そしてここでもリグレットは大衆の注目の的となっていた。  
表通りと同じように遠くて眺めている人がほとんどだが、中には  
声を掛けてくるものもいた。

「よー、ネーちゃん……ヒック……ものすごい美人だなー……ヒ  
ック……俺と一緒に酒場で杯をかわさねえか？」

明らかに『僕、酔っ払ってます』と言わんばかりの男が声を掛け  
てくる。

しかもまだ飲み足りないのか、リグレットを酒場に誘ってきた。  
ある意味強者かもしれない。

リグレットはもちろんそんな誘いなど軽くあしらう……と思いき  
や、彼女から出た言葉は意外なものだった。

「酒場、か。いいだろう、案内しろ」

リグレットは意外にも肯定を示した。

これにはミュウも声を掛けてきた男ですらも驚愕していた。

「ふっ。女はそうこなくっちゃな。ネーちゃん、こっちだ」

男は嫌らしく笑みを浮かべると、手を招いて彼女を誘導しながら  
先導した。

ミュウはリグレットの肩にピョンと飛び移ると、そのまま彼女に  
耳打ちをした。

「（リグレットさん、いいのです？ ああいう男の人が好みですの

「？」

「（そんなわけないだろう！……酒場は情報の溜まり場でもあるからな。それに何故かこういう輩は重要な情報を隠し持っていることが多い）」

「（みゅう。でもなんだか危なそうな雰囲気ですの〜）」

「（まあ、これほど下落した暗黒街だ。少しくらい発砲騒ぎになった所で特に問題はないだろう）」

「（みゅみゅっ！？）」

さすがに発砲騒ぎは不味い気がするのだが、リグレットの目は本気だ。

つまりそういう事態も有り得ると言うことだろう。

「ネーちゃん……ヒック……ついたぞ。ここが酒場だ」

「そうか、ご苦労だった」

ガンッ！

「はう……っ！」

酒場に着いた途端、この男にはもう用済みと言わんばかりに、彼の後頭部を譜業銃の柄でぶん殴るリグレット。

当たり所が悪かったのか、それとも彼女が狙ってやったことなのか、男はその一撃で気絶し目を回しながら地に伏せた。

「よし、行くぞ」

「（……着いてくるんじゃないかったですの〜！）」

リグレットの大胆行動を目の当たりにしたミュウは、早くも後悔の念に浸るのであった。

## 第9話 おっかないおっさんの像（後書き）

見てくれてありがとうございます！

そろそろ9話分全部見直してみて、誤字脱字を修正していこうかと思えます。

サブタイ横に（改）がたくさんついていても内容は変わっていませんのでご安心を

## 第10話 桃色の髪と黒い導師服（前書き）

実はというと僕、TOAのサブクエを結構見逃しながら一回クリアしただけなんですよね。

なので物語に変な矛盾が出てきてしまうかもしれませんがご了承ください。まあ、異世界を出している時点で矛盾もなにもないんですけどねw

## 第10話 桃色の髪と黒い導師服

店内はある意味予想通りの墮落っぷりだった。

酔った男が酒瓶を片手に暴れていたり、周りの客に絡んで喧嘩になつていたりとまさに酒乱の地獄絵図。

現在もゴロツキ達によるパイ生地を用いたドッジボールが開催されている。

ミウ達はそんな最中に酒場のドアを潜った。

リグレットはドアを潜ると、何の前ぶれもなくいきなり譜業銃を構えた。

「おい、ゴロツキ共。ケガをしたくなかったらヴァーゲストの動向について知っていることを全て話せ」

「（いきなり脅しですのっ!?!）」

彼女が先ほど言った通り、いきなり発砲騒ぎの前兆を……しかも自分から見せるリグレット。

ある意味ゴロツキよりも性質が悪いかも知れない。

しかし、大半のゴロツキは彼女の脅しに全く動じていない様子だった。

「はっ！ そんな風に銃を向けられることなど、こっちは日常茶飯事でな。そんなんじゃ全くビビんねんだ……よっ！」

セリフを終えるのと同時に、リグレットに向けてパイ生地を投げ付けるゴロツキ。

それが基点となって、周りにいたゴロツキ達も次々に生地を投げてきた。

リグレットは余裕でその全ての投擲を交わす。軽やかなステップで、右へ、左へ、下へ……

「おぶっ！」

だが、リグレットが下へ避けた瞬間、彼女の頭の上に居たミュウの顔面に見事パイ生地が命中した。

「すまない。お前が居たの忘れていたわ」

「忘れてた……じゃないですよ〜！ リグレットさん酷いですよ〜」

顔を生地塗れにしながら涙目で訴えるミュウ。

「分かった分かった。とりあえずこれで顔をふけ」

そう言い、どこから取り出したハンカチを手渡し、ミュウを氣遣うリグレット。

「みゅう。ありがとうございます〜」

リグレットの厚意を素直に受けとるミュウ。

やはり彼女、ミュウの前ではたまに優しい一面を見せる。

「それと、顔を拭くときは頭から降りてくれ。私の髪にパイくずが付く」

「みゅみゅっ！？」

そう言つと、ミュウが自ら降りる前にリグレットは彼の耳を引っつかみ、少々乱暴に地面へ投げ捨てた。

優しいリグレットはほんの一瞬にして、閃光のように消え失せて

いたのだった。

ミュウが床に降りて顔を拭いている最中にも、ゴロツキ達の怒涛のパイ投げ攻撃は続いていた。

当然、一発も当たる気配はないのだが、いつまでも鳴り止まないその攻撃にリグレットは痺れを切らし始める。

「仕方ない。脅しではなく、本気だということを少し示してやろう」

そう言い放つと、リグレットは宙に飛び回るパイを一眼し、両手に構えた銃の引き金に指を掛けた。

バンバンバンバンバンっ！！

相変わらず見事な早撃ちが店内に炸裂する。

そして、弾道は全て空中に投げ放たれていたパイに命中し、生地は粉と化して床に散らばった。

「「「……………」」」

信じられない神業を目の当たりにしたゴロツキ達は、口を開けたまま目を見開いて固まった。

室内に充満する沈黙、その均衡を解いたのはミュウだった。

「おぶひゅあっ！」



黙する室内の中、ミュウの悲鳴に近い声が響いた。

見ると、リグレットが粉にしたパイ生地を今度は頭から被っている彼の姿があった。

頭上に飛び交うパイが粉になれば、当然床に座っていたミュウはその粉くずを頭から被ることになる。

ミュウにしてみれば突然大量の粉が頭から振ってきたようなものだ。

「……リグレットさん」

今度は粉まみれになりながら、再び哀みの目でリグレットを見つめるミュウ。

その表情からは少々怒気も放たれていた。

「さあ、この床に散らばるパイみたいになりたくなかったら、知っている情報を全て話すのだな」

「（無視ですよ！？）」

極自然にミュウの存在をスルーして、話を先へ進めるリグレット。よく見ると、彼女の頬に一筋の汗が流れていた。

彼女なりに『やってしまった』と思う所はあるらしい。

しかし、チーグル相手に頭を下げるのはプライドが許さないのか、リグレットはなるべくミュウの姿を視界にいれないようにしている。俗に言う『気付かないフリ』である。

「か、格好良い……」

突然、ゴロツキの一人がポツリと言葉を漏らした。

それに連なって、他のゴロツキ達も次々に心中を言葉に漏らし始

めた。

「美しい……」

「（ぼーっ……）」

リグレットの銃技とその美しい容姿に見惚れ、次々と頬を朱に染めてゆく男共。

そして、ここから怒涛の自己アピールタイムが始まる。

「姐さん！ 俺の持っている情報、全て教えます！」

「いやいや、姐さん！ 俺の方が良い情報を持ってまっせ！」

「バカ言え！ 姐さんに情報を与えるのは俺に決まっているだろ！」

リグレットのことを『姐さん』と称して、彼女に詰寄ってくる男共。

このコントみたいな状況に当のリグレットはただ困惑とするしかなかった。

「なるほど。街の中にまでヴァーゲストの手駒が徘徊しているのか」

リグレットの睨んだ通り、ゴロツキ達はたくさんの貴重情報を隠し持っていた。

彼女は奥にあるテーブルに腰を掛け、一人一人ゴロツキ達的情報を丁寧に聞き入っていた。今の男でもう四人目だ。

話を終えると次の男が新たな情報を語る。一人一人の話が長いの

で、彼女の席の後ろには『姐さん待ち』と称される情報屋達の列が連なっていた。

もはやリグレットの魅力に酒場中の男を虜になっている……と、思いきや、一人だけカウンターの奥でつまらなそうにしている男がいた。

「（けっ、何が姐さんだよ。俺の店は客の気性の荒さが売りだつたのに）」

そう、この酒場のマスターだ。彼はつまらなそうに舌打ちをしながらいグレットを睨み続けている。

「（オマケに俺の店をメチャクチャにしやがって……あゝ。くそ！ムシヤクシヤする！）」

店がメチャクチャだったのは彼女が店に入る前からだったはずだが、マスターは何か彼女に因縁を付けないと気が済まなくなっていた。

そんなマスターの視界にふとある珍物の姿が目に入った。

「（ふっ、こいつは使えるかもしれねえなあ）」

マスターが嫌らしく浮かべる笑みの先には、勝手に店の料理を食べ始めているミユウの姿があった。

一方リグレットの方はようやく一段落つけそうなくらい情報屋の人数を消化していた。

数十人から得た情報を彼女は一言一句逃さず記憶していた。これにはさすがのリグレットにも疲労の色が見え始めている。

そしてついに『姐さん待ち』の列は無くなり、最後の情報屋が彼女と対向して席についた。

「俺の情報なんですが……いや、情報とはいいがたいかも知れませんが、昨日、妙な女が俺の店に訪ねてきたんすよ」

どうやらこの男は情報屋ではなく、どこかの店主らしい。

「どんな女だ？」

リグレットが聞き返すと、彼はゆっくりと真実の回想を語り始めた。

「女……というより、子供だな。年は十そこそこくらいの……そのガキが俺にこう訪ねてきたんすよ。『ソーサリーリングという響律付を見たことはないか？』ってね」

「（やはり、ヴァーゲストは部下を総導出させてリングを探しているのか）」

ある意味リグレットの予想通りの情報。

しかしこの後、男は思いも寄らぬ情報を語り始めた。

「相手はガキだから適当にあしらおうと思ったんすけど……そのガキ、後ろにライガとフレスベルグなんて連れてやがった。もう俺は腰が引けちゃったよ」

その言葉を聞いた瞬間、リグレットは思いつきり表情を強張らせた。

そして迫るように男に詰寄ると、緊迫した表情のままこう聞き返す。

「……っ！？ おい！ その女の特徴は！？ 外見はっ！？」

「と、特徴っすか？ 長い桃色の髪に……黒い導師服を着ていたな。妙に根暗なガキでヘンテコなヌイグルミみたいなものを抱いていた」

「……っ！！」

微妙に曖昧な特徴表現だが、リグレットに取っては確信的な言葉だった。

「（まさか……まさか……でもなぜだ？ なぜアイツがリングを探る必要があるのだ？ ……ま、まさか……）」

リグレットの表情は動揺からか曇っていた。確証があるわけではない、だが男が言った特徴の全てに彼女の知り合いの姿が当てはまっていた。

「（詳しく調べる必要があるな）。情報提供感謝する！ ……ミュウ、行くわよ！」

ガタンと音を立て、席を立つと、リグレットは他のテーブルの上で料理を食べていたミュウに声を掛けた。

「みゅみゅーう、分かりま」

「そうは行かねえなあっ！」

ミュウがリグレットの傍へ駆け寄ろうとしたその時、店のマスターがミュウの身体を引っ掴み、そして彼の頭に包丁を突きつけてきた。

## 第10話 桃色の髪と黒い導師服（後書き）

見てくれてありがとうございます！

実は投稿するうえで一番悩ましいのはサブタイトルなんですよね。

今回みたいに本文ネタバレを含んだタイトルは自重した方がいいのかなあ？ ふゝむ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028z/>

---

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

2011年12月19日18時50分発行